昼のにおい

父のことを思い出すと、決まって連想するにおいがある。夏の夕方、父は帰宅すると、兄と私を庭へ呼び出して、庭仕事を手伝わせた。「ここはこんなふうに…」と指示されるままに、ふたりは汗まみれになって草を抜き土を運んだ。疲れたなと思い始めたころに「ご飯ですよ」と母の声がする。父が「最後に水をやって、それから手を洗って食事にしよう」と言うと、そのとき、「昼のにおい」がした。

正確には、昼の終わりのにおいとでも言うべきだろう。一日中強い陽に焼かれた草木が、水を得て生き返るにおい、それとも、乾き切った土が、ごくごくとのどを鳴らして水を飲むにおいだったのだろうか。どちらにしても、ようやく庭仕事から解放され、兄と顔を見合わせてにっこりうなずき合うときの、忘れられないうれしいにおいであった。

手伝いへのお礼のつもりもあったのだろう、「夕涼みがてら…」と機嫌のいい日の父は、私たちを庭へ連れ出し花火をした。もっとも、花火といっても、当時のことだから、打ち上げ花火や、通りがかりの人を驚かせるほど大きな音を出す物はない。ゆかた姿でゆったりといすに腰を下ろす父の所へ、花火を持って行き火をつけてもらう。「これが、最後」父がそう言って火をつけてくれた１本が消えると、それまで火の花をじっと見つめて

いた目には、一瞬辺りが暗やみになってしまう。その瞬間、もう一度「昼のにおい」がした。子供の時間が終わる少しさびしいにおいだった。

昔のことをすべて覚えているわけではないが、何かがきっかけになって、ふと思い出すことがいくつかある。父が亡くなって10年余り。子供たちにねだられ、ときどき公園で一緒に花火をする。花火は子供たちにも思い出として残るのだろうか。大きくなって懐かしく思い出すのはどんなことだろうかと、楽しそうな子供たちの姿を眺めつつ、「昼のにおい」を思い出す。